

桜蔭俳話会 六月句会 (第三二六回)

平成二十五年六月二十三日(日)

会場・桜蔭会館

4点①父の歩に合はせしをさな柿若葉 清子

ストレスのなきがストレスところてん 守

3点①荒梅雨や門棒のガムテープ 守

3点 命名にルビを入れをり若葉雨 ツル子

2点①初蛩つなく幼の手の柔し 友子

①山の湖緑に映えり山法師 幸

①草刈るや母の背中に汗のしみ 邦子

①風涼し動く歩道の曲り角 真三

迎賓館の樹木の太き松落葉 幸

玄関てふ菊の御紋に燕かな 幸

日に日にと古巢に声の高まりて ツル子

水饅頭点滴あとの青き痣 守

鎌倉へ祈ぎごとひとつ葵咲く 清子

1点①提灯と瀬音頼りの蛩道 友子

久しぶり活躍始める扇風機 邦子

混み合ひし箆笥一段儼の花 明美

幸運のまはり合せや髪洗ふ 清子

夏至の雨挿絵の美しき本ひろぐ 秀一

心まで病みてはならじ梅雨菌 守

夕暮れの水に怯まぬ蜘蛛の糸 明美

松籟や雨の上がりし五月富士 秀一

虚空から落ちる夢覚む籠枕 秀一

色あせて思い出深し日傘かな 邦子

消えかかる航跡ひとつ夏の潮 明美

薫風やメタセコイアのつづく道 清子

水無月に世界遺産だ富士の山 直子

仔羊群れ毛刈りし親の子離れ期 幸

竹林の風夏蝶を舞ひ上ぐる 友子

法要の青き僧侶の夏めきて ツル子

飽きもせぬインターネットアマリリス 秀一

※

見渡すや並木きつちり夏の川 真三

紫陽花の可愛ゆし光る歩ゆむ道 真三

甚五郎の竜の彫りもの緑さす 清子

紫陽花にしとしと雨が降りそそぐ 直子

クールビズノーネクタイで更衣	ツル子
青柿や小さな果実甘くなれ	直子
父に似し食の好みや初鱈	友子
梅雨空は天気予報が頼りなり	直子
梅雨匂ふ木魚の音の湿りけり	ツル子
朝餉前皿に五六個さくらんぼ	真三
牧五月八重の会津を駆けし馬	幸
この枇杷は小さいけれど味がよい	直子
六月の行楽駅の喪服かな	秀一
梅雨冷や鉄とガラスの街昏るる	守
万緑の中や文士の終の家	友子
夏草や雨降るごとに背伸びする	邦子
炎天の海沿ひの路さかなの絵	明美
素足にて寄木細工の床を踏み	幸
梅雨晴間露天風呂入る忘我の湯	真三
雨止みて羽広げ飛ぶアゲハかな	邦子
(不在投句 古野明美、原田清子、平野邦子)	

「七月定例句会のお知らせ」

- ・ 期日 七月二十八日(日)午後一時三十分から
 - ・ 場所 桜蔭会館(横浜市西区藤棚町2の197)
- 通信句会参加の方も、五句持参の上、奮ってご参加ください。